

2026年3月発行

茨木御堂 第306号



真宗大谷派



茨木別院

(輪番 河原 恵)

〒567-0817 茨木市別院町3-31
TEL (072) 622-2903
FAX (072) 625-9445

南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう

みんなに原真いがかけられている

大棟鬼瓦制作



「如実修行相応」

教えの如く

信ずる

こころなり

(『真宗聖典』第二版五九七頁)

朝夕の時間が長くなってきました。寒い冬の終わりを告げるように、梅の花が咲き始めました。暗い冬の日のおかげで、明るい日の光のありがたさを深く感じるができます。「煩惱の水解けて、功德の水と成る」(『真宗聖典』第二版二二九頁)という言葉が思われる今日この頃です。

「如実修行相応は信心ひとつにさだめたり」(『真宗聖典』第二版五九六頁)という御和讃の、「如実修行相応」のところに、親鸞聖人は「教えの如く信ずるこころなり」と左訓しておられます。

「教え」とは何でしょうか。仏教では、仏として、この娑婆の世界に興された釈尊が、凡夫の私たちを救うために説かれた教えのことです。浄土真宗では、「阿弥陀如来の誓願不思議にたすけられて往生をとげると信じ、念仏申さんと思うことで、摂取不捨の利益をいただく人生をたまる」(『真宗聖典』第二版七六七頁抄)ということです。

浄土真宗の教えは、私たちが修行してさとりを開くという教えではありません。それは自力の教えです。凡夫である私たちは、自力では自分も人も救われません。

それでは、どうすれば救われるのでしょうか。私のたしかる力は、私の中には無いと信知することです。すべてが阿弥陀如来の不思議な誓願力によるという教えを信じることです。その誓願力を讃嘆し、「南無阿弥陀仏」と念仏申さんと思う心が湧いてきたとき、どれほど自己中心的で、物に執着してしか生きられない「罪惡深重、煩惱熾盛」の者であっても、(さらには、そういう者であるからこそ)必ず救うというのが阿弥陀如来の本願だからです。

このような凡夫であり、底下である私が救われる道を、如来の真実信心にいただいて、ただ念仏一つを称えて生かされる者となるのであると思うのです。

南無阿弥陀仏 輪番 河原恵

茨木別院関連ホームページ

茨木別院 ➔ ibarakibetsuin.or.jp

いばらき大谷学園 ➔ ibarakibetsuin.or.jp/kids/

茨木別院

検索

茨木別院 月行事ご案内

● 教如上人ご命日・五日講(同朋会)

- ・ 日時 五日(木) 午後一時半より
- ・ 会場 茨木別院会館
- ・ 講師 加藤 恵師

● 本山九日講

- ・ 日時 九日(月) 午後二時より
- ・ 会所 光善寺
- ・ 講師 茨木別院輪番

三月

● 春季彼岸会ーお勤めと法話ー

- ・ 日時 十九日(木) 午後一時半より午後三時頃まで
- ・ 会場 茨木別院会館
- ・ 講師 茨木別院輪番

● 親鸞聖人ご命日・二十八日講

- ・ 日時 二十八日(土) 午前一時半より
- ・ 会所 茨木別院会館
- ・ 講師 茨木別院輪番

● 教如上人ご命日・五日講(同朋会)

- ・ 日時 五日(日) 午後一時半より
- ・ 会場 茨木別院会館
- ・ 講師 加藤 恵師

● 本山九日講

- ・ 日時 九日(木) 午後二時より
- ・ 会所 圓長寺
- ・ 講師 茨木別院輪番

● 親鸞聖人ご命日・二十八日講

- ・ 日時 二十八日(火) 午後一時半より
- ・ 会場 茨木別院会館
- ・ 講師 茨木別院輪番

● 本山九日講

茨木別院を中心に大阪教区第十・十一組の北摂地域のご寺院を会所として毎月九日の午後二時より、本山九日講を開催しております。講員は随時募集しておりますので、お近くのご寺院にてお時間がございましたらぜひご参加ください。

令和八年度本山九日講予定

一月	茨木別院	茨木市別院町 三ー三一
二月	教行寺	高槻市富田町 六ー一〇ー一
三月	光善寺	茨木市島 二ー三一ー一六
四月	圓長寺	茨木市島 二ー三一ー一五
五月	専想寺	茨木市春日 三ー一ー二五
七月	教圓寺	茨木市大字佐保 五三六
八月	慈光寺	茨木市鮎川 四ー五ー一五
九月	善勝寺	摂津市鳥飼下 二ー二四ー一一
十月	明善寺	摂津市島 二ー一ー一八



園の子どもたちへ

いばらき大谷学園



今年度も残りわずかとなりました

三学期に入り、プールの水が凍ったり、大阪では珍しく雪が降ったり、とても寒い日が続きましたが、そんな中でも子どもたちは元気いっぱい園庭を走り回っています。やっぱり戸外遊びが一番好き！という子どもたちが多く、笑い声やおしゃべりなどで毎日賑やかに遊んでいます。

三学期は次の学年に向けての準備期間です。ひとつおにいさん・おねえさんになる、その心構えが大切な時期となります。豆まき・おゆうぎ会・ひなまつり・お別れ会など、たくさん行事の中で成長する姿を見せてくれるので、とても楽しみです。来年度に向けて一歩踏み出してほしいと思います。

豆まきでは各学年とてもユニークな鬼を作り、当日は自分の中の鬼をやっつける為、たくさん豆をまきました。果たして鬼をやっつけることは出来たのでしょうか？子どもたちに聞いてみてください。

おゆうぎ会は今年度最後の大きな行事となります！本堂の工事の為、プレイルームで行いました。色々な物語から子どもたちと一緒に各クラスで試行錯誤しながら作り上げていきました。子どもたちの楽しんで演じている姿はとってもかっこよかったです。

今年度も残り一か月。年長組はいよいよ卒園です。東本願寺の参拝もみんな楽しみにしているようです。もうすぐ小学一年生！小学生になってからの活躍を楽しみにしています。

木村千夏

時には魔法のルールで

吉田 泰子

皆さんが小さい頃、年上の子と鬼ごっこなどのゲームで遊ぶ時に「小さいから捕まっても鬼はしなくていいよ」と小さい子が楽しめるようにする優しい魔法のルールにしてもらったことはありませんか？みんなであれこれ考えてくれて、遊びに混ぜてもらえるのがとても嬉しかったことを覚えていてます。

担任している二歳児クラスでこんなことがありました。クラスでは絵カード取り(かるた)が流行っています。真剣そのもので、競技かるたのような勢いで展開されています。初めは、ルールがわからずうまく取れないお友だちもいて「先生と一緒にしようね」と一緒に取ったり、わかるように目の前のカードを読んだりしました。それを「ずるい」と怒る子はいません。取れるとうれしい、楽しいと知っているの「ここのだよ」と教えてあげたり、取れずに悔しがる友だちに「大丈夫、頑張れ」と応援して、次のカードはその子が取れるように待つてあげたりしていました。お友だちの寄り添う優しい思いやりのルールに、心が温かくなりました。(今はルールもわかり、お互い手加減なしです(笑))

さて、この春新しい一歩を踏み出す子どもたち。「できる」けど、「できないかも」「できるけどやってほしい」と不安で心が揺れ動きます。そんな時は、ぜひ「いいよ、一緒にしよう」と一緒にしてあげてください。できると知っているけど知らないふりで受け入れてもらったその安心感が、一歩を踏み出す力になります。時には、魔法のルールで包んであげてくださいね。

皆さん、卒園、入学、進級おめでとう！



二〇二五年十一月十五日 日中法話

「仏教における信仰の問題」(二)

講師：宮下 晴輝 師

(大谷大学名誉教授)



これまでのまとめ

先に、親鸞聖人の仏道の課題、求道の課題について、恵信尼のお手紙に記されていることを手掛かりにお話ししました。そこでは、法然上人にお会いして、上人から「生死いづべき道」を教えていただき、それだと確信されて法然上人のもとに行かれることになったのだと記されていました。

親鸞聖人ご自身は、後世を祈つて六角堂にこもり、また後世のたすかる縁を求めて法然上人に会うことになりました。そしてその後世のことについて、法然上人は、生死いづべき道をただ一筋にお説きになったとありました。

繰り返しになりますが、その「後世を祈る」とは、「いかにしてかこのたび往生ののぞみをとぐべき」と祈ることであったということも話しました。その「いかにしてかこのたび往生ののぞみをとぐるか」という問いに対して、法然上人からは、生死いづべき道は念仏だと教えられたということでありました。さらに、簡略でしたが、「往生」という言葉の意味と、『歎

異抄』の第二条にある「往生極楽」、すなわち「仏土に往生する」ということの意味を簡単に確認しました。

親鸞聖人の「往生ののぞみをとぐる」という課題と、法然上人から教えられた「生死を出づる道」との関係をもう少し『歎異抄』の言葉によりながら、整理しておくことにします。

往生をとぐることに生死を出づること

『歎異抄』第一条に「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあづけしめたまうなり」とあります。これは、親鸞聖人の教えの要として、唯円が受けとめたものだと言えます。

第二条では、関東の門弟に向かつて、あなたたちは「ひとえに往生極楽の道をといきかんがため」にたずねてきたのですねと言っています。そして「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」と、その往生の道とは念仏よりほかにはないのだとはっきり言っています。

第一条で「往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさん」というのは、第二条の「往生の道は念仏のほかにはない」ということと同じです。つまり、往生をとぐるのは本願を信じて念仏するほかにないと言っているのです。

つぎに、資料に、『歎異抄』第十一条を引いておきました。唯円が親鸞聖人の言葉を交えながら教えをまとめたところにあたります。「誓願の不思議によりて、たもちやすく、となえやすき名号^{みょうごう}を案じいだしたまいて、この名字をとえんものをむかえとらんと、御約束あることなれば」とあります。本願、誓願は、「約束」とも言われています。「この名字をとえんものをむかえとらん」という約束なのです。そして続いて、本願はそういう約束なのですから、「まず弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて、生死をいづべしと信じて、念仏のもうさるるも、如来の御はからいなりとおもえば」と言っているのです。

この第十一条の言葉は、先に見た第一条の「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて念仏申さん」という言葉と、まったく同じだと言えます。この「信じて念仏する」という構造がまったく同じです。第一条は弥陀の本願にたすけられて往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんと、そして第十一条では弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて生死をいづべしと信じて念仏のもうさるるも、とあります。

ここにあるのは「本願を信じて念仏もうす」ということなんです。それが基本的に変わらない。そしてどういうことを課題として信ずるのかというと、「往生をばとぐるなり」と、

あるいは「生死をいづべし」と、こういうふうに言われています。これは、言葉が違いますが、仏道の同じ課題を語っているのだと受けとめる必要があります。つまり、往生をとぐるといふことは、他ならず、生死をいづることだと、こういうふう^うに受けとめなければなりません。往生をとぐるということ^{こと}を、どこかに生まれていきやいいんだと、なんか他人ごとのように言うんではなくて、我々が生死をいづること、生死を離れることとして往生をとげたいということ、このたびは往生をとげんというそういう祈りのような課題がそこにあるのだということです。往生という言葉の内実として、生死をいづべしということがあるのだ、ということを確認しておく必要があります。

また『歎異抄』の第十二条でも、「念仏申さば仏になる」といって、そのあとでも「我も人も生死をはなれんことこそ」と、生死をはなれることこそが「諸仏^{しよぶつ}のご本意である」、弥陀たちの本当の願いであると言っています。

『歎異抄』の親鸞聖人の教えでも、「生死をいづる」「生死をはなれる」ということ、それが仏法を学ぶ、仏法の教えを聞くことの、本当の一番の要にあることだと、これが『歎異抄』の教えの中に説かれています。したがって、親鸞聖人の仏道を求めた根本の課題はどこにあったのかというと、往生をとげることであり、それはすなわち、生死をはなれる、生

死をいづることにあったといえます。そしてそれは念仏によるのだということなのです。

經典の中国への伝承

では、どうして仏道の課題が、生死をいづること、生死を離れることと説かれることになったのかについてお話ししていきます。

この「生死」という言葉の「生」は、生まれるということなのです。だから「生死」とは、漢字としては、生まれて死んでいくことです。そしてここに「生死を離れる」「生死を出離する」という仏道の課題があるということなのです。これは親鸞聖人や法然上人だけでなく、仏教全体の課題なのです。ただ「生死」という言葉は、前にも言いましたが、漢訳として出てくるのです。

中国に仏教が伝わったのは紀元後二世紀です。安世高という人が、最初に中国にやってきて漢訳をはじめます。その次に中国の洛陽というところに支婁迦讖がやってきます。安世高はペルシア(安息国)の人といわれています。支婁迦讖はウズベキスタンのあたり、月氏国の生まれといわれています。安世高は伝統的な仏教を翻訳しました。

仏教經典を大きく分けると、阿含經典と大乘經典の二つがあります。阿含經典といっても、それは一つの經典ではなく、

そこにはたくさんのお説が經典として伝えられています。これが、釈尊の教説として最初にまとめられた經典になります。釈尊が八十歳で生涯を終えられるまでに多くの教説を残されました。釈尊が入滅された後、その教説をお弟子さんたちが集まって確認し、口頭伝承で伝えられました。それが阿含經典といわれるものです。

お釈迦さんの時代は紀元前六世紀から五世紀といわれています。中央アジアから中国まで仏教が伝わってきて、ずっと阿含經の教えは伝わっていくのですが、紀元前後に新しい經典が現れます。それを大乘經典といいます。新しい經典が現れるとはどういうことなのか、大きな問題となります。必要であったから生まれてくるわけですがどういう意味をもつかが重要な問題であります。

私たちは親鸞聖人の教えを聞いています。親鸞聖人はどのような經典を大事にされたかというと、『無量壽經』になります。たくさんお経が翻訳されて伝わってきます。その中から『無量壽經』を選んでいきます。それは法然上人も同じでながく続いている伝統でもあります。親鸞聖人は『無量壽經』を学び、最も大事な經典と位置付けます。大乘經典の一つになります。あと『觀無量壽經』と『阿彌陀經』もあります。その三つを三部經といって大事にされてきました。これはすべて大乘經典であり、阿含經典ではありません。

中国において、阿含經典も大乘經典も、すべて漢訳されています。紀元後二世紀ごろからどちらも一緒に翻訳されてきました。インドでは、阿含經典ははじめからあり、釈尊滅後の五〇〇年頃以降に大乘經典が現れてきますが、インドではそのような歴史的な順序があります。したがってまた、後になって教説が現れるのはおかしいではないかという批判も同時に現れています。中国では、そういう歴史的な経緯はなく、一緒に翻訳されました。そして、これだけ多くの經典を受けとめるため、中国の人たちは努力しました。何が經典の中で一番大事なのかを見つける工夫を行います。いろいろな方法があるのですが、そのなかの一つに、『法華經』が一番大事であるという選びがありました。これによって天台宗が興り、比叡山にまで伝わります。外にもそういう大事な經典の選びの努力が起ります。華嚴經を中心にする華嚴宗が現れたり、龍樹菩薩の教えを中心にするものが現れたりします。そして親鸞聖人は『無量壽經』を中心にした仏道の教えを学んでいくことになります。

流転生死

阿含經典や大乘經典のいずれを翻訳するときにも、「生死」という漢訳が用いられました。仏道の課題は「生死をいづる」ということであり、阿含經典でも大乘經典でも同様で

す。このように理解したのが、中国の仏教徒の受けとめ方になります。この言葉によって考えて見ると、「生死」すなわち「生まれて死ぬ」ということ、そこにある問題が仏教の課題であると受けとめられています。

インド語のサンサーラという言葉が、「生死」と漢訳されました。現代ではそのサンサーラを輪回と翻訳することが一般的になっています。当時の中国では「生死」と訳され、そこに当時の人たちの受けとめがあったのだと思われます。

「サンサーラ」というインド語そのものは、「一緒に流れていく」という意味の言葉です。それを中国で、最初に「生死」と訳したのです。しかし三世紀ころには、「生死」という言葉だけではなく、「生死」に「流転」という語を付け加えて訳されるようになっていきます。つまり「サンサーラ」という語を、「流転生死」(生死を流転する)や「輪転生死」(生死を輪転する)と訳するようになります。「生死」という言葉だけで漢訳され続けているのですが、それに加えて「流転生死」あるいは「生死流転」などという訳も多く見出だされてくるようになります。おそらく「サンサーラ」という語がもっていた「漂流する」という意味を加えて翻訳するにいたったのでしょう。

(次号に続く)

〈合祀納骨案内〉

合祀墓を増設いたしました。詳細については茨木別院事務所までお問い合わせください。

■特別納骨

納骨料…五〇万円

■個別納骨

納骨料…三〇万円～一〇万円

※法名プレート刻銘料三万三千元が別途必要となります。

■合同納骨

納骨料…七万円

●茨木別院事務所

☎〇七二―六二二―二九〇三



敬 弔

ご生前のご遺徳を偲び、
謹んで哀悼の意を表します。(敬称略)

記

●法名 釋顯義

俗名 田中義雄 八十五歳

●法名 浄照院釋興隆

俗名 鈴木隆志 九十二歳

●法名 功德院釋宝海

俗名 松本功 九十六歳

●法名 釋治定

俗名 三好憲治 九十三歳

●法名 釋尼歆喜

俗名 稲垣喜久子 九十八歳

●法名 釋尼世英

俗名 久富泰世 九十四歳

編集後記

茨木別院本堂改修工事が始まり、早くも一年が経ちました。おかげさまで工事は順調に進んでいるようです。

さて、三月はお彼岸の月です。昨年引き続き、本年も会館仏間にてお勤めをいたします。お墓参りとあわせて、ぜひ彼岸会の法要にもご参加いただければ幸いです。

本年の春季彼岸会は、三月十九日に茨木別院にてお勤めいたします。お浄土へ還られた亡き方々を偲び、ともにお念仏申すひとときを一緒にできましたらありがたく存じます。

竹内明人

— 生花・供花・けいこ花 —

株式会社 花 廣

茨木市大手町二二八

☎(〇七二)六二二―二四〇二